

インターネット公開許諾がない文章には墨消し処理を施しています。

## 社會改造と佛教の根本精神

小林 義 道

社會改造問題の本質并に其の形相

ハツクスレーは其の名著進化と道德に於て、下の様なことを言つて居る、曰く

「社會進化は一步々々宇宙的過程を抑制して、倫理的過程とも稱すべきものにて、之れに代らしめる變化を指して言ふのである、而して其の目的は何かと言へば、凡そ人類が獲得した總ての條件に對して、最も都合良く適した人が存續するのではなく、倫理的に最も善なる人々の繁榮する事即ち是れである」

と、此の言は實に社會改造の問題の本質をいみぢくも言ひ當てたものだと思ふ。自分

生物の進化は生存競争に依り、生存競争の結果は適者は存續し不適者は死滅すると言ふ所謂自然淘汰の作用を効果し、以て生物は今日の狀態に到つたとは、ダルウイソの説く所である、もとより、ダルウイン及び其の學徒に依つて建設せられたる自然現象に關する原理原則、即ち變種淘汰遺傳及び順應の法則の總べてが、何等の割引も異論もなくして受取らるべきか如何かは疑問であるし、まして人類社會の進化が徹頭徹尾此の法則以外に出ないと斷言することは、餘りに無謀大膽といはねばなるまい。然し今暫く確實緻密なる科學的研究を離れて大雜把な考へ方をして見た所で、人間が身體を有し動物と同じく食物を採つて生活して居る限り、飽迄自然現象の一部であり、従つて自然界の法則に支配せらるゝものなること如何して拒めやうか、社會

進化を論ずる學者にして變異淘汰遺傳順應等の原理を無視するもの殆んど無いのは尤もの次第であり、吾人も亦社會進化の過程に於いて、自然淘汰の嚴然として行はるゝの事實を確かに信ずるものである。けれども茲に注意すべきは、所謂適者存續の適者、フヒツテストの意義である。やゝもすると人は勝てば官軍負れば賊軍の理法を以て、適者は即ち是善者也と判斷し易い、言ひ換ふれば適者は優良者だと合點する事が多い、果して適者は優良なるが故に存續するのであらうか。吾人は幾多の生物界に現はる事實に依つて必ずしも其の然らざる事を證明するに難くないのである。否却つて自然淘汰の過程に於ては優良者なるの故に死滅し、劣弱者なるの故に存續する現象さへも屢々見得るのである。そは恰も人類の戦争に於いて勇敢にして體軀強健なるもの眞先きに敵彈に斃るゝの悲惨事とは同じわけ、さればダルウインの所謂適者とは環界を標準としての適者であつて其は強き者、善き者より完全なる者とは全く異なる觀念なることを知らねばならぬ。

茲に於て吾人は斷言する、生物界の進化には自然淘汰は免れぬ事實であるとは言ふものゝ其は決して合理的のものではない、何れかと言へば其場限りの出鱈目なものと言はねばならぬ、而して此の出鱈目の淘汰こそ前述のハツクスレーの宇宙的過

程と呼んだ所であるなれば、人類社會の進化は、單に斯くの如き過程より一步も外に出ないと考ふるのは餘りに人間の力を理性を見縊つたものではないか、宜なりハツクスレーの如き自然科學者と雖左様は見なかつた、彼も倫理的過程の發達に人間の眞の進化の根據を置いたのである。

文明の進歩とは人間が自然に支配せられて居る状態より脱する事である、自然の桎梏を漸次打破つて逆に自然を支配するに至る道行きである、とは良く言はれる事である、生物が生存のために競争して居る間は、自然淘汰に全然支配せられざるを得ない、然し現在の進歩せる人間社會は單に生きると言ふ事には最早没頭して居ない従つて現在の人間には生存競争よりも更に一步進んだ競争が活動の眼目となつて居るのである、即ち良く生きる、より立派に生きむとする競争、換言すれば文化への競争が主要なるものとなつて居る、而して斯かる意味の競争には自然淘汰はそのタイラント振りを發揮する事は出来ない、此處には不合理なる適者繁昌の法則は著しく其の支配力を減殺せられねばならぬ、そして其に代つて人間の精神力、詳しく言へば善なる者價值ある者をして益々榮えしめんとする理想的淘汰の活動が益々其の正當なる支配の位置に就かむとするのである、之れを要言すれば社會進化の過程に於

ける不合理なる自然淘汰に對する人間の合理的なる理想的淘汰への努力、こゝに社會問題の根本的原因が存し、偶然的な自然の淘汰に任して出來上つた、不合理な人間社會の諸々の關係を打破して其處に合理的なより善なる新しい社會關係を樹立せんとする是實に所謂社會問題の本質でなければならぬ。

社會問題を右の如く觀る時其は畢竟單なる經濟學上の問題ではあり得ない。勿論經濟の問題を度外視しては到底社會問題の根據を捉へる事は出來ない(近來社會改造の問題は人心の改造問題に歸すてふ唯心的見解が反動的に一部の人人々に依つて力説せられつゝあるが故に特に言つて置く)が、既に社會關係に於ける不公正を認め之れを公正化せむとする問題は、倫理學上の問題である。

スタインが「吾等は胃の腑の問題は既に解決せられたと斷言し得る、然し君よさればと言つて社會問題も又解決せられたと想像しては不可なり、饑渴に苦み悩んだ胃は既に沈靜に歸した、けれども激動せる心臓、翹望せる頭腦は未だ決して満足しては居ない」と言つたのは此の間の消息を示したものである。然らば所謂激動せる心臓の對境は何であるか、翹望せる頭腦の目的は抑々何であるか。こゝで吾人は社會改造問題の形相を述べねばならぬ。現代に於いて社會改造問題として數へらるゝものは實

に濱の眞砂子の其れの如しとも言ひたい曰く何曰く何と枚擧した日には遂に一切の社會事象を悉さんければならぬであらう。殊に世界大戰後の改造の語は既に往生とか精進とか言ふ言葉と同じく言語上の墮落をなして居ると言つてよい。そこで自分は今斯かる面倒臭くて面かもあまり役にもたぬ仕事は暫く度外視して、此の改造の大潮流の主潮たる三つのもを擧げて、是に就いて論じて見やう。謂ふ所の三とは

### 一、資本對勞働の問題

### 二、強國對弱國の問題

### 三、男子對女子の問題

一 資本對勞働の問題は現代社會問題の根幹を形成せるものであつて、一般に社會問題と稱する時は、人直ちに此の問題を思ひ浮べる程現代人にとつてはポピュラーになつて居る。従て今更改めて自分が説明するまでもない様だが、自分が本論の初に社會改造問題に對して下した定義にあて嵌めて見れば、下の如くに言ふ事が出来るであらう。曰く「産業社會の進化の過程に於ける自然的結果である不合理な社會的條件に對して自己の地位の不當を自覺して來た勞働者階級及び斯かる不合理な

る産業組織に憤激せる近代の社會的良心が理想的産業組織の實現に向つて熱烈なる欣求をなし、あらゆる手段を盡して目的を達成せんとしつゝあることに外ならぬ。

二、國際上には由來力の存する所即ち正義の存する所なりとの觀念が働いて來た。勿論此の思想が國際關係を規定する唯一の力でなかつたことは、逆に「正義は力なり」の標語が今度の世界戦争に依つて初めて唱へられたものでもなく、東洋に於いても昔から「人衆ければ天に勝つ、天定まれば人に勝つ」と言ふ語が格言の様に使用せられて居た邊より觀ても其處に理想的淘汰の幾分は作用して居たことを認めぬわけにはゆかぬ、けれども其は何處までも幾分であつて主要なる動因ではなかつた事は説明するまでもない、俗に泥棒にも三分の理と言ふ事がある。如何に利己主義一點張の征服慾から戰端を開いたにせよ表面上其れを赤裸々に宣戰の理由としたものは恐く無いと言へる、人間は其處に何等かの道德的意義を見付け、自國が正義の軍であることを主張しなければ晏如たり得ぬのである。茲に吾等は、大なる希望を寄せる事が出来る、例令其れが今日まで單なる口實、自己欺瞞の氣休めであつたとしてやがては之れが最も重要な有力な國際上の動機となり得ないとは何人か斷言出來やう。人はよく千八百十五年の神聖同盟を以て鬼の念佛の如く思ひ、其の成果の無意義に

終つた事を嘲笑したから今度の國際聯盟も亦々斯くの如きものだ。腹の底で極め込んで掛かる。然し自分は之等を單に痴人夢を説くの類だと一概に考へ度くない。其れは如何にも賢相で實は淺薄極まる見解と言はねばならぬ。考へて見るがよい。侵略主義専制主義の張本人である露國皇帝でさへも奈翁戰爭の大慘劇を現實に經驗しては遂に窮達の血路を博愛仁慈の大精神に求めねばならぬと言ふのは一體何事を吾等に教ゆるであらうか。人類の殆んど全部をして劍を把り銃を提げて千古未曾有の大渦亂を起さした。今次の世界戰亂の終結は國際的正義の高潮及び民族自決の實現を標語として、漸くかの利害關係相錯雜せる列國を曲りなりにも納得せしめ得たと言ふ事は一體吾等に何を語るか。吾人は之を輕々に看過してはならぬ。自分はこゝにかの不合理なる生存競争に於ける自然淘汰に對して人類の高尙なる理想的淘汰の勝利を認めるものである。

國際的正義、民族自決の語を以て一ウイルソンの發明でありとし、ウイルソン米國を背景とせる彼の發明なるが故に列國をして不承不承にも許せしめたりと觀るは一を知つて二を知らざる短見の譏を免れない。例令ウイルソンの口より出でたりとするも其の主張の根抵が若しデモクラチックでなく強者則正者の思想に立脚して

居たならば、其は到底講和會議を無事に終へる事は出来なかつたに相違ない。

三 男子對女子の問題、誰かゞ第十八世紀は政治上の革命時代、第十九世紀は經濟上の革命時代、而して第二十世紀は男女關係の革命時代だと言つた。或は左様かも知れぬ。

米國では本年九月十八日にテネシー州上院に於て婦人參政權に對する憲法第九條修正案が通過した事により、茲に米國中三十六州の批准規定數を滿たした事になり、今や全米國憲法として婦人の參政權を許さうとするのである。實に一八五四年此の目的を達せんとするの運動を起してより六十七年の長年月を経て居る。

英國では既に佛蘭西革命の後間もなく婦人に選舉權を與えよとの説が起り、爾後此の問題は年と共に盛んに赴き、一九〇六年には此に關する婦人の暴動が倫敦に發生した位、其れでも萬事舊弊好きな英國のことゝて、仲々要求が容れられ相にもなかつたが、遂に今度の世界戰亂に婦人の活動の頗る目覺しきものと共に、一九一八年三十歳以上の婦人に參政權を與ふる事となつた。

未だ普通選舉さえも行はれて居らぬ我國から觀る時は、まるで夢の様な話であり、又世界中の二箇國と言ふのであるから、隨分言つて見れば、縁遠い話の様でもある。然

し斯かる現象の根底をなして居る思想の如何なるものであるかを考ふる時、それは決して對岸の火事ではなく、實に吾等にとつても頗る緊切な問題であることを思はざるを得ない。

婦人問題の要旨は、女子を家庭より解放せよと言ふにある、女子の能力を其が延るがまゝに延ばさしめよと言ふにある、政治上に於いても社會上に於いても經濟上に於いても其他あらゆる方面に於いて、さらに言ひ換ふれば女子を男子の玩弄品たる事より解放し男子と同様なる自主的人格として取扱へと言ふのである。

以上自分は略々社會改造問題の本質と其の主要なる形相に就いて考へて來た。そこで今よりは一步進んで、然らば斯くの如き問題が長き過去の歴史の過程に於いて左程顯著な時代の中心問題とならず、現代に至つて特に其の重大な意義を有するが如きは何故であるか。換言せば第二十世紀が社會問題の時代であると稱せらるゝに就いては、現代をして然あらしむる特別なる事情があらねばならぬ、それは一體何であるかについて論を進めよう。

### 唯心的歴史觀と唯物的歴史觀

唯心論と唯物論とは人間に思想と言ふものが顯れてより以來、常に相對立し廣く

は時代より時代へ所謂動反動の法則を以て、互に主となり従となりつゝ變轉して來た、之れを暫く個人に就いて觀ても或る時は靈が肉を征し、或る時は肉が靈の上に猛威を振ひ、兩者の矛盾反擊裡に於ける推移が人の生涯である。自分は今人類社會發展の歴史を眺めて其が動因が唯心的のものであるか、若しくは唯物物的のものであるかにつき結論を企てやうとは思はない、それよりも寧ろ此の二様の見解は實際に一般に考へられて居る様に両立しない相反的のものであるのか、或は一見矛盾の様であつても事實は相即不離の實在の二面に過ぎないのではないか如何を調べて見やうと思ふ、それも哲學上の抽象的議論ではなく現在自分の取扱ふて居る具體的の現象即ち人類社會の發達につき、端的に當つて見やう。

唯心論歴史觀に依れば、人類社會の一切の出來事は偏へに人間精神の發露にある、従つて人類の進化とは此の精神力の發展を指すのであると、斯く靈の力を重視する結果は、物質即ち肉の要求を輕視し社會の存在及び發展に對して物質力即ち經濟力の効果を言ふに足らざるものと觀るのである、されば彼等の見解を以てすれば、現代に於いて社會改造問題の喧しいのは、是全く人間の靈性の覆はれて暗愚なる精神が社會に滿ち渡れるが故である、新しい要求を提出せるものが其れか、舊來の思想に安住せるものが其れか、何れにしても、故に此問題の解決は須く人心を改造し、各人愛の

精神を以て處せよと言ふに歸する。然し自分は斷言する、縱令唯心論者が幾ら口を爛して世界にかゝることを獅子吼した所で、實際問題に何等の解決をも齎さないであらう。

唯物的歴史觀に依れば、社會の一切の現象は必ず其の根柢に於いて經濟力に基礎をおいて居る、如何なる社會的事件と雖、其の經濟的基礎を措いては到底真相を窺知せられない、されば社會の經濟的條件の變動する所、そこには必然に社會組織の變動社會關係の動搖を見ざるを得ない、現代に於いて特に社會改造の問題の崛起を見るは全く經濟的條件の一大進化に依る當然の結果である、従つて殊更に人心の改造を力説するは無用の困事業結局は經濟事情に適合する様に人心も、従つて社會組織も關係も決着せらるゝであらうと言ふのである。

### 問題の眞の解釋

我等は此の一見正反對の如き二箇の見解をよくよく吟味し、そして一方社會進化の歴史を正視する時二箇の主張の何れもが確かに幾分の事實に立脚して居るのを見る、然し兩方ともに事實の全體を把握して居ないことをも知るのである、本當の事を言へばこうなのである。現代の社會改造の問題の主要なる主張は、何も今日初めて

人間の頭に浮び出たことではなく、既に二千年も三千年も以前、苟しくも人類に文明とも言はれるべきものが現はれた時、或る人々に依つて理想として唱道せられたいな。啻に理想として論せられたるのみならず、其が實行の上にも屢々顯はされたのである。

ツウガン、バラノウスキが其著近代社會主義の歴史的發達の初にカントの所謂「人格の觀念」を離れて、近代の社會問題を考へやうとするは全く無意義である、之を除いては社會問題は存在し得ないと言つて居るのは何事を語れるのであるか。彼と言ふ所は勞働問題を指して居るのみではあるが、一切の社會問題は其の發現の原理に於いて勞働問題と少しも異なる事なきは本論の最初に於いて述べた通りである。然らば今日自分は所謂カントの人格の觀念の如何なるものなるかを考へ見やう。

カントの人格の觀念を簡單に言へば、人間の行爲は一定の目的を持つて居る、そして其の目的は吾等にとつて何等かの價值がある、自然界の萬物は吾人の目的を實現する手段として價值があるに過ぎないが、獨り理性を有する人間のみは彼自身が目的の主體である、故に人格は絶對的價值を有して居る、そこで道德的法則は人に自己及び他人を以て常に目的として扱ひ決して人格を手段として遇すべきではない。社

會に於ける人的關係を以上に言ふ如き人格的關係たらしめ様とする所に社會問題の基礎がありとすれば、それは「同發菩提心、往生安樂國」とか「自他法界同利益、共生極樂成佛土」の願心と何處に相違があるか、更に自分は社會問題の論者は餘り引用せぬが、しかし尊き偉大なる英の碩學グリーンンの語を引合に出したい、彼は「倫理學序説」に曰く「道德の進歩とは共同善の求めらるべき人格の範圍の擴張である、少數なる人々に對してのみ認められたる義務が漸次に一切の人々に對する義務とせられる事である。換言せば特權の廢止である、其の社會の或人々は受動的團體、附屬的機具として存し、社會的進歩又は退歩の決を斷定する場合には彼等の生命境遇の如きは顧慮するを要せずとするが如き思想制度の絶滅に向つて進む事である」と。實に斯くの如きは現時の勞働問題、婦人問題、國際問題、の強い要求であらねばならぬ。此點に於いて自分は唯心論的歴史觀の主張に同意する。然しながら、何故僅かに人間の一部の先覺の要求であつたものが俄然今日に於いて世界の大多數の人々の要求となり所謂思想の問題でなく、社會の現實の問題として力強さを示すに至つたのかを考ふる時、自分は唯物論歴史觀の主張に耳を假さざるを得ないのである。即ちそれは近代産業社會の偉大なる進歩の結果、世界の經濟的相互依存の實が愈々明確にされ、戰爭は勝者敗者何れ

をも益せしむる事漸々困難となり來つた事は自然人道の觀念に現實的根據を與ふる様になり、ゾムバルトの所謂獨逸大學助教の俸給にも劣らざる收入を有するに至りしが故に紳士として生活し得らるゝ經濟的基礎を確保したる結果米國勞動者は往々にして人格問題を原因にストライキを惹起するに至つたのである。更に婦人問題に於いては其の運動が眞劍味を有する所には必ず其れに比例して婦人の職業の範圍が擴張されてあり、經濟的に獨立せる若しくは獨立し得る能力を有する婦人の多き社會に於いて此の問題が力強く社會を動かせるに見て明かであらう。果して然りとせば現代の社會改造の問題が眞に實行の問題として根強さと活潑さを保持するは其の土臺としては物質の力が嚴存せるが故である。而して斯くの如き産業社會の偉大なる進歩、詳しく言へば一切の人類をして各々自己自身目的たるの實狀を社會に實現せんとの運動を生ぜしめ得るが如き大なる經濟力を獲得するに至りしは何に因るかと言へば、こは言ふまでもなく近代科學の發達の賜物である、人間の得たる科學的知識の應用の結果に外ならぬ。此の意味に於いて吾等は過去に於ける科學上の幾多の研究者、發明者、發見者、及び其を實際に生産の事業に應用して呉れた人々に對して、人類向上發展の方向目標を指示して呉れた聖人と同様に深き感謝

の意を表せねばならない。

今や問題は略々明瞭になつた。吾人の努むるが上にも努むべきは、人類進歩の根本目的たる「同發菩提心往生安樂國」を常に思念して夢之の理想を見失はぬ事であらねばならぬ、そは無餘修であらねばならぬ。長時修であり無間修であり、そして恭敬修であらねばならぬ。而かも吾人の活動は此の理想實現のために自己の天分に任せ、機根に應じて、直接間接産業の健實なる發達に貢献し以て各人を絶對的價値たる人格に到達せしむる事の可能なる、如き社會を確立せしめねばならぬ、そこには精進の競争は在存するであらう、然し争鬭や憎惡があつてはならぬ、そは「同發菩提心」の理想より離れることであるから、かくの如くんば吾等は本來の目的のために目的を失ふと言ふ堪え難き撞着に陥るのである。

時代は既に社會改造を要求し得るまでに進んだ此の問題が確かに人類全體の強い聲となつて渾圓球上に響き渡る事が出来る程社會の物質的事情は準備せられたのである。今まで社會學者の學說として説かれて居た社會有機制説は最早吾等には單なる學說ではなくして一種の信仰となりつゝある。それには血が通ひ脈が高鳴りしつゝある。今こそ心地觀經に説かれた次ぎの言葉の眞意が正しく了解せられる

あらう。少なくとも現代を了解し得る丈の頭腦と熱情とを有するものには、有難く拜讀せらるべきに相違ない。曰く

衆生思とは則ち無始以來一切衆生五道に輪轉して百千劫を經、多生の中に於て互に父母となる。互に父母となるを以ての故に一切の男子は即ち是慈父なり一切の女人は則ち是慈母なり、昔生々の時大恩あるが故に猶現在の父母の恩の如く等くして差別なし、是の如き昔恩猶報ひず或は妄業によりて諸の違順を生ず、執着を以ての故に反りて其の怨をなす、何を以ての故に無明宿性、智明を覆障し、前生曾て父母の恩に報ひ互に饒益をなす所を悟らざればなり、是の因縁を以て諸の衆生の類一切の時に於いて亦大恩ありて其の恩報い難し。

吾等は幸いにして互に饒益する所を悟らんとしつゝあるを衷心より喜ばなければならぬ。

## 結 論

自分は最後に當りて今一度般若經の語を引用する事を許して貰ふ、曰く

若し問ふ者ありて誰れか是恩を知りて能く恩に報ゆる者なりやと言はゞ正に答へて曰ふべし、佛は之れ恩を知りて能く恩に報ゆる者なりと、何を以ての故に一切

世間恩を知りて恩に報ゆるは佛に過ぎたるなきが故に」と

蓋し之れ佛一代の御活動は報恩に終始して居るを言ふたものであらう、一切の報恩の行は即ち之れ佛作佛行である、佛一代の願行は四弘誓願と其の實行にあつた、而して其は悉く報恩であると言ふ所に何んと吾等の胸奥に有難い光明を投げ込まるとではないか。信仰即生活の眞意義は確かにこゝに存すること自分は深く感するのである。

そこには「共生極樂成佛土」のために特別なる修行の方法があるわけで無い、吾等の日々の營み、そは商業であらうが、工業であらうが、政務であらうが、農業であらうが、何等の差異も存在しない、そが悉皆成佛の理想國土を顯現するの聖行である事を自覺し「願以此功德平等施一切」と廻向する時、是こそ眞に生活即信仰ではないか。(終)

## 阿含物語 (二)

梅村舜道